

2 漢代における変遷

i 前漢・新（付図1～3）

a 供膳具・水器 付図1）

飲器 飲器には高足杯、把手付杯、角杯などがあり、横長の長杯や耳杯もここで扱う。高足杯には、杯身が縦長で、体部が直なもの（以下、Ⅰ類）が主流である。この時代のⅠ類はまだ足がそれ程高くなく、途中で突帯もない（1-Bb1・Eb1・Ga1）。後漢代まで大きな変化はない。金属器は前漢晩期の広西・合浦出土銅器（1-Ma1）ぐらいで、他は玉器や陶器。前122年頃に没した広州・南越王墓の玉器には、返りのある内被せの蓋が伴う（文献47）。初現は秦末～前漢初の広西・羅泊湾墓例出土玉器（文献503）。戦国中期後半の四川・雲陽墓M17出土銅器は、台が極めて低く、杯身の両側に環耳がつく。外被せ蓋も伴う（文献242）。前118～104頃に没した河北・満城漢墓M2出土の陶器（文献3）は、盟約などに用いた朱雀を飾る連繫杯で特殊例。以後にはつづかない。

前113年に没した河北・満城漢墓M1出土の鍍金銅盒（1-H1）は通高14.5cm、口径5.5cm。用途は不明だが、飲器の可能性はある。（以下、筒状杯Ⅰ類と称す）。類例は前433に没した湖北・曾侯乙墓の漆器筒状杯（文献6）。以後の例は少ない。

把手付杯には、杯身が円筒形のもの（以下、Ⅰ類）と、底に向かってすばまる通常の杯（以下、Ⅱ類）とがある。把手は環状で、体部上半に1個つけるのが原則。Ⅰ類は、底に三脚のつくもの（1-Eb2・Ga2・Kb1・Lb1・Oa1・Ta1）とつかないもの（文献477）があり、外被せないしは内被せ蓋のつくことが多い。蓋には原則として3個の立飾がつき、環状把手に角状の突起があるのが特徴。総じて杯身は縦に長いのも特徴である（以下、Ⅰ類A）。銅器、玉器、象牙製、陶器それに漆器もある。戦国中期の河南・洛陽墓出土銅器（文献150）が最も古そうである。Ⅱ類は前漢晩期の広西・望牛岭墓出土鍍金銅器（1-Ma3）や湖北・光化墓出土漆器（1-Mb2）。ともに低い高台と、突起付き環状把手がつく（以下、Ⅱ類A）。南京・栖霞山出土の銅器（文献504）は後者に近いが、高台は幾分か高い。前漢中頃かというが、晩期と推測する。湖南・永川の劉彊墓出土銅器（1-La2）は把手に突起がない（以下、Ⅱ類B）。時期は前漢中期というが、他の器種も新しいものがあり、晩期に比定すべきであろう。これらより古い例は知らない。

なお、景帝（前140年没）陽陵従葬孔出土の銅器（1-Ac1）はⅠ類Aに似るが、高さより口径が大きいもの。大小5種を入子にしており、量器と考えている。後漢のⅠ類Bの祖形と考えるが、定かでない。高台のない半球状の身に1個の環状把手をつけた前130～124年頃の山西省博物館蔵銅器（1-Ad2）は、「田官」の陽刻があり、口径約17cm、高さ約10cmで、漢代一升にあたることから、量器と考定されている。

角杯は、前122年頃の広州・南越王墓から玉器が出土（文献8）。角杯は新石器時代に陶器（文献390）があるが、漢代の例は少ない。この時期には曲長杯はない。

耳杯は銅器、玉器、陶器それに漆器がある（1-Ba1・Ga3・H2・Ia1・Kc2・Lb3・Oa2・

R1・Tb2)。耳の形は、戦国中期頃に、三翼形から半月形に変わり、前漢に継承される。耳杯の口縁はほぼ水平で、耳が上向きなのが特徴（以下、Ⅰ類）。耳杯は飲器に限らない。小盤が普及する以前は羹や肉などを盛った食器でもあった。

杯・碗・^{*}簋・鉢 高足杯や耳杯など除くと、前漢・新代で杯と呼んでいる例は、それ以前を含めていない。口径10cm以下のものをあえて抽出すると、前漢早期の湖南・資興出土陶器（1-E d3）や前118～104年の河北・満城漢墓M2出土象牙製品（1-H5）のように、体部が丸味をもって立ち上がる浅目のもの（以下、高台付杯Ⅰ類A）と、前漢中期の湖南・資興出土銅器（1-Ka4）や前漢晩期の広州漢墓出土陶器（文献4）のようにやや深目のもの（以下、高台付杯Ⅰ類B）とがある。新代の湖南・零陵出土銅器（1-W1）は、高い器台をもったもので、酒鑑とするが、環耳がなく、小型である点が異なる（以下、高台付杯Ⅱ類）。いずれも初現である。Ⅱ類は器形が酷似する大型の酒鑑とセットをなし、酒杯として用いられた可能性が高い。この他に、口径が10cm前後で、平底の浅目の陶器（1-S b3）が新代の四川・綿陽から出土している。三国時代では、これに類したものを杯と呼んでいるのに従う。体部が外傾気味である（以下、平底杯Ⅲ類）。

簋は碗の祖型の一つである。殷・西周代の簋は大型であるが、前433年の湖北・曾侯乙墓では、半球状の身に環耳と三足をもつ口径14.6cm、高さ6cmの金器が出土（文献6）。蓋付きで、透しのある匕（漏匕）を伴い、中に羹などが入っていたと推定できる。戦国早・中期には低い高台をもち、身あるいは蓋にも環耳をつけた口径15cm前後の河南・陝県出土銅器がある（文献7）。前漢早期の湖北・宜昌出土銅器（1-E a4）はその最終例である。

碗は、前漢・新代には、高台付碗、高台のつかない丸底碗と平底碗がある。次述する鉢との区別が難しいものがあるが、鉢は比較的大型で概して浅目、碗は深目とした。

高台付碗は、丸味をもった体部がほぼ直に立ち上がるもの（以下、Ⅰ類）と、体部が外傾気味となって口縁で外反するもの（以下、Ⅱ類）がある。Ⅰ類は前313年の河南中山国王墓や戦国末期の洛陽出土の陶器がある（文献28・495）。例は少ない。前漢早期で、江蘇・徐州出土の陶器（1-B b2）がある。比較的浅目なのが特徴（以下、Ⅰ類A）。Ⅱ類は、新代の湖南・零陵出土銅器（1-W2）。以後の例に比して浅目で、高台も低い（以下、Ⅱ類A）。類例はきわめて少ない。後漢につづく。

丸底碗は、前漢晩期の江蘇・南京出土銅器（文献55）や湖南・劉彊墓と広西・合浦出土銅器（1-Mb5・Oa3）が初出のようである。深目なのが特徴（以下、Ⅰ類）。新代の四川・綿陽出土銅器（1-S b4）は、丈がやや低い（以下、Ⅱ類）。ともに後漢につづく。

平底碗は戦国晩期の山東・臨淄出土銅器（文献429）があり、前漢中期の湖南・資興出土銅器（1-Ka5）や前漢晩期の内蒙古出土銅器（1-R5）に継承される。深目なのが特徴（以下、Ⅰ類）。後漢以後にもつづく。

鉢は、碗に似るが、比較的大型で浅目のものである。高台付と、高台がつかない丸底と平底とがある。高台の有無にかかわらず、体部がゆるやかに内弯してそのまま直立するもの（以下、Ⅰ類）と口縁で外反するもの（以下、Ⅱ類）に分類する。なお、内縁部が強く内弯するものを、中国では水盂あるいは盂と呼ぶ。内弯の程度が弱いものは、日本で用いている鉄鉢形の用語をあてる。

高台付鉢のⅠ類は、前313年の河南・中山王国墓出土の陶器（文献28）、戦国晩期の漆器（文献341）などがある。前118～104年頃の河北・満城M2出土陶器（文献3）も大差ない。Ⅱ類は、戦国晩期の山東・臨淄出土銅器（文献429）が初現のようである。前漢早期には湖北・雲夢出土漆器（1-Ba3）がある。大形で浅目なのが特徴（以下、Ⅱ類A）。前漢中期の山東・臨沂出土鍍金銀器（文献191）や河南・陝県出土銅器（1-Ib2）は、大型だがやや深目（以下、Ⅱ類B）。前漢中期の湖南・永川出土銅器（1-La4）は、さらに深目で、口縁のくびれがやや強い（以下、Ⅱ類C）。

丸底鉢はⅠ類の銅器が戦国晩期から秦代にかけてある（文献22・503）。前118～104年の河北・満城漢墓M2出土の陶器（1-H6）も同巧である。

平底鉢のⅠ類は、戦國中・晩期が初現のようである（文献22・28）。体部は直に開くのが特徴（以下、Ⅰ類A）。前122年頃の広州・南越王墓出土銅器（1-Ga4）は、体部が丸味をもつ（以下、Ⅰ類B）。

盂 盂は前122年頃の広州・南越王墓出土陶器（1-Ga5）が初現例の一つ。浅目で平底なのが特徴（以下、Ⅰ類）。前105年の安徽・汝陰侯墓出土漆器（文献505）は、低い高台がつき、扁平な蓋を伴う。銘文から唾壺の機能を果たしたことがわかる。唾壺は後漢以後に壺として定型化されるが、汝陰侯例はそれ以前の様相を示す。盂は前漢・新代には類例が乏しく、後漢から類例がやや増加する。

舟 楕円形の器。短側に1個の環状把手がつくもの（以下、Ⅰ類）と、つかないもの（以下、Ⅱ類）とがある。Ⅰ類は、前113年の河北・満城漢墓M1出土銅器（1-H7）で、1個の環状把手がつき、外面は雷文地に鳳などの文様を飾り、鍍金を施す。同形が5個有り、口径5.2×8.3cm、深さ2.8cmのものから、口径18.2～25.9cm、深さ9cmのものまで、少しずつ大きさが異なる。報告では、容量に一定の規律があり、専門的な用途とあったとする。飲器ではなく、量器の可能性が残る。Ⅱ類は、景帝（前140年没）従葬孔出土鉄器（1-Ac3）、前漢中期の山東・劉髡墓出土銅器（1-Ia3）がある。後者には勺が入って出土しており、酒か羹などを入れたと推測できる。以後の例はない。

魁 碗あるいは鉢形の容器に1個の把手をつけたもの。把手は龍頭形が基本。初現は、前漢晩期の銅器や陶器（1-R8）。前者のうち1点（1-Ma10）は把手が中空になっており、匱の機能も兼備する唯一例である。新代の銅器（1-Ta8）も大差ない。いずれも把手がほぼ水平であるのが特徴（以下、Ⅰ類A）。

酒鑑 前漢晩期の湖南・張端君墓出土銅器（1-N6）が自名器。大型の碗に似るが、環耳がつき、この時期の碗に比して高台が高いのも特徴。同巧の銅器は、前漢中期の湖南・資興出土例（1-Ka6）が初現。後漢にも存続するが、前漢晩期はまだ高台が直で、また低いのが特徴である（以下、Ⅰ類）。

盤・沐盤・浴銅 盤は、口径が30cm以上を大盤、20～30cm程度を中盤、15cm前後を小盤と呼ぶ。沐盤は、既述したように口径60cm程の特に大きな前漢晩期の湖南・張端君墓出土銅器（1-N11）。口縁が水平に折れて伸び、体部に強い稜があり、2個の環耳がつく。同様の器形（以下、Ⅰ類A）で大型品の銅器は、前漢代に多い。（1-Ga11・Kb8・Lb8・Ob9）環耳のない銅器（以下、Ⅰ類B）も前漢代を通してある（1-Ab6・Ab7・Ba6・Da5・Ga10・H12・Ja5・Q

a9・Ta10)。後者のうち、口径31cmと比較的小さい、前漢晩期の山東・五蓮M1墓出土銅器（文献366）、未盗掘で、伴出した銅匱と組み合うものは他になく、これらも沐盤であったと推定できる。ただし、盤の主流は大盤Ⅰ類が占めることから、沐盤だけでなく、食物を盛る器として使用されたものも含むと考える。ともに後漢に残るが、次第にすたれていく。

他に、盤あるいは混乱して盆、洗とも呼んでいるもので、30cmを超える大型品には、出土例は極めて少ないが、体部が直に外傾し、口縁端が外折して水平に伸びるもの（以下、Ⅱ類）、体部に稜があるが、口縁が外折せず直立気味のもの（以下、Ⅲ類）、体部が丸みを持ち、口縁端で外反するもの（以下、Ⅳ類）がある。Ⅱ類は、前漢前期の広州漢墓出土銅器（1-F8）。大きな平底で、環耳のつくものとつかないものがある。以後にはつづかない。後述する爐の下盤であった可能性が強い。Ⅲ類は前漢前期の広州漢墓出土銅器（1-F9）。平底で環耳がつく。口径47.2cmの特大型であり、浴用（浴銅）であろう。類例は戦国早・中期の安徽・江蘇省出土銅器（文献169・229）にある。新・後漢に降る例はなく、古い時期の、中国南半部に限定されそうである。Ⅳ類は内蒙古・フフホト出土銅器（1-Pa8）。時期は前漢中・晩期とするが、伴出した銅鋤などからみて晩期に比定する。

口径が30～20cmほどの中盤には、大盤と器形がほぼ同じⅠ類B種が前113年の満城漢墓M1出土ガラス器（文献3）や銅器などがあるが、大盤に比して出土例ははるかに少ない。この手のものの一部が、火爐や薫爐の下盤に用いられていることは後述する通りである。口径に比してやや深目のものは、鉢のような機能を果たしたのかもしれない。口径27.2cmのものに「飯槃」の自名器（文献43）があり、飯を盛ったことが知れる。中盤には、大盤Ⅱ・Ⅲ類と類似したもの他に、平底の扁平な盤で、体部がほぼ直線的に開くもの（以下、Ⅴ類）がある。Ⅱ類は、前漢早期の湖北・随州出土漆器（文献458）、前漢中期の湖南・資興出土の陶器（1-Ka3）、晩期の内蒙古出土銅器（1-R3）など。この類はすでに戦国中期の湖南・慈利出土陶器（文献506）、秦代の河南・三門峽市出土の口径21cm、高さ約3cmの銅器（文献175）などにあるが、例は極めて少ない。Ⅲ類は前118～104年の河北・満城漢墓M2出土銅器（1-H4）。前後の時期の類例はない。Ⅴ類は前漢晩期頃と推定する内蒙古出土陶器（1-R4）。高台はつかない（以下、Ⅴ類A）前漢・新代の例は乏しく、後漢から多くなる。耳杯や杯・碗類の下盤に用いられた可能性が強い。

口径15cm前後の小盤は、Ⅰ類Bが前118～104年頃の満城漢墓M2出土銅器（1-H3）、Ⅱ類が晩期の内蒙古出土銅器（1-R2）。内蒙古例は薫爐の下盤の可能性が高く、満城漢墓例もその可能性がある。いずれにしても小盤は、極めて出土例が少ないといえる。

浴銅は、前漢早期の江蘇・徐州の楚王墓出土銀器（1-Ca6）が自名器。平底鉢Ⅱ類に似るが特大型（以下、Ⅱ類）。前113年の満城漢墓M1出土鍍金銅器（1-H13）は盤Ⅰ類を深くしたような特大型。「常浴」の刻名がある（以下、Ⅰ類）。前122年頃の広州・南越王墓出土銅器（文献8）もⅠ類の同巧品。上述した大盤Ⅲ類（1-F9）も浴器の可能性もある。いずれも前漢中期以後はすたれる。

盆・銅 盆は、秦に近い前漢初と比定する河南・陝県墓出土銅器（1-Aa5）が最も古く、初現。自名器でもあり、2個の環耳をもつ。体部は内弯気味で口縁部がゆるやかに外反するのが特徴（以下、Ⅰ類）。底に3個の突起（乳釘）がある。安定をはかるためか。釜・甗とともに

出土。前漢早期の湖北・宜昌出土銅器（1-Ea7）や前113年に没した河北・満城漢墓M1とその妻のM2から出土した自名器の鍍金銅器（第1図3、1-H9）もほぼ同巧。乳釘はなく、低い高台をつくものが出現する。前漢中期の山西・朔県出土銅器（1-Ja4）もほぼ同巧だが、前漢晩期の四川・重慶出土銅器（1-Lb6）、新代の四川・巫山出土銅器（1-Sb5）は頸部のくびれがやや強くなる（以下、Ⅱ類）。前漢晩期の湖南・劉彊墓出土銅器（1-Oa5）は、環耳がないが、Ⅱ類に似ており、これに含める。

銅は、深目のもの（以下、深銅）と浅目のもの（以下、浅銅）とがあり、それぞれ環耳のつかないもの（以下、Ⅰ類）とつくもの（以下、Ⅱ類）とがある。Ⅰ類は素面、Ⅱ類は体部に突線をめぐらす例が多い。深銅Ⅰ類は、戦国中期の河南・陝県出土銅器（文献7）が初出のようである。戦国晩期～前漢の陶器は例が多く、銅器は前漢晩期の陝西・西安出土例（1-Qb7）があり、後漢にもつづく。浅銅Ⅰ類は前漢早期の河南・洛陽出土例（1-Ab4）が初現。前118～104年の満城漢墓M2出土銅器（1-H8）、前漢前期の広州漢墓出土銅器（1-F5）や前漢中期の河南・陝県出土銅器（文献7）もほぼ同巧。深銅Ⅱ類は、前漢中期の湖南・資興出土銅器（1-Ka7）や前漢晩期の四川・重慶出土銅器（1-Lb5）。これらより古い例はない。浅銅Ⅱ類は、前漢前期の広州漢墓出土銅器（1-F6）が初現。大きな平底で浅目（以下、Ⅱ類A）。前漢晩期の内蒙古フフホトや他の内蒙古出土銅器（1-Pa4・R5）は高台付で、体部が外傾気味となる（以下、Ⅱ類B）。

洗・鑑・匱 洗にも深目の深洗と、浅目の浅洗とがある。ともに環耳があるのが基本。深洗は前漢晩期の湖南・張瑞君墓出土銅器（1-N9）や広西・望牛嶺出土銅器（文献75）が初現例のようである。前者は底に乳釘がある。新代の四川・巫山出土銅器（1-Sb7）も同巧で、口縁の立ち上がり弱いのが特徴である（以下、深洗Ⅰ類A）。浅洗は、ミニチュアながら、前漢晩期の張瑞君墓出土銅器（1-N8）や同じ頃の湖南・永川出土鍍金銅器（1-Oa6）が初出例。前漢末～新代の江蘇・邗江M102出土鍍金銅器（1-Sa6）も同巧。体部が内弯気味で、口縁がほぼ水平であるのが特徴（以下、浅洗Ⅰ類A）。

鑑はたらいであり、水浴や食物の保存器としても使われた。戦国期の鑑と類似するのは、前122頃の広州・南越王墓出土銅器（1-Ga8）。以後の例はない。

匱は鉢状の器に片口の注口を作ったもの。注口とは逆の端に把手か環耳をつけるのが古調。形は楕円形、円形、桃形、方形があるが、前三者は基本的に秦までで終わる。前漢は方匱が主で、一部に円匱が残る。前漢の円匱は、前113年の満城漢墓M1出土銅器（文献3）と銀器（1-H11）。銅器は8枚を入れ子にした比較的小型品で、沃盥の礼器というよりも宴会で酒などを注ぐのに用いられた可能性を示す。銀器は銀製針も出土していることから、医療用と推定している。以後はすたれる。方匱は、戦国晩期の湖北出土銅器（文献238）が初出例で、環耳をもつ。方匱の銅器は前漢各期（1-Ba5・Ca3・Da4・Ga9・H10・Pb7）にあり、新代（1-Sa9）にも及ぶが、後漢には途絶える。

盒 蓋付の碗は碗の項で取り上げるが、前漢・新代は身に蓋受けを作ったものばかりである。戦国期から、高台付の身に、環状撮みの蓋を伴うもの（以下、Ⅰ類）と、撮みがないか遊環をつけたもの（以下、Ⅱ類）とがある。前漢では前者が主（1-Ba4・Lb7）。後者のうち前122年頃の広州・南越王墓出土銀器（1-Ga6）は西アジア産とみる。前漢晩期から新代に限って

は、器体の前面に鋸齒文など飾った銅器（1-Mb7・Ub3）がある。長安からも出土しているが、中国南半部に多い。そのうちの一つである広西・合浦出土銅器（1-Mb7）には果核が入っていた。Ⅰ類は後漢につづかない。他に漆器では、化粧用の円筒形の盒があるが、ここでは取り上げない。

豆 高杯である。西周代にあった環耳付きのものや有蓋豆は、戦国晩期までにすたれ、シンプルな器形のみが前漢に残るが、出土例は極めて少ない。陶器（1-Bc2）や漆器があるが、金属製品は知らない。杯部が角張るもの（以下、Ⅰ類）と、丸味をもつもの（以下、Ⅱ類）があり、脚も高いものと低いものがあるが、戦国期と大差はない。戦国期ではⅠ・Ⅱ類が一基の墓で相伴しており、用途の差があったと推測される。

有蓋豆の消失は、五穀や粥・羹あるいはスープを豆で食べる習慣が無くなったことを示す（文献43）。果物などを盛ったと想定される無蓋豆も出土例が少なく、その機能も盤に移ったと考えられよう。

b 貯蔵具・注器（付図2）

扁壺・俵形壺・瓶 扁壺は戦国期に出現する。前313年の河南・中山国王墓出土銅器（文献28）はその古い例の一つ。前漢初期の湖北・雲夢出土銅器（2-Ba2）、前漢早期の湖北・随州出土漆器（文献458）、前漢前期の広州漢墓出土銅器（2-F2）、ミニチュアである前118～104年の河北・満城漢墓M2出土銅器（2-H2）は戦国晩期・秦の伝統（文献238・341）をひき、丈が低目で、最大径が胴中位にある（以下、Ⅰ類）。いずれも低い高台がつく。このうち、雲夢例のように口縁が蒜頭^{サン}で、蓋でなく栓をつめるのは、秦末～前漢初に限られる。後述する蒜頭瓶の特徴と一致する。前漢晩期の内蒙古フフホト出土銅器（2-Pa3）や広西・望牛岭出土銅器（文献75）は体部が下肥れになる（以下、Ⅱ類）。後者は、両肩の環耳に鎖がつき、水筒にふさわしい。内蒙古ではⅠ・Ⅱ類の陶器が多くみられる（文献30）。前漢早期の江蘇・徐州楚王墓出土銅器（2-Ca2）は肩の張った壺型で、片口になる点も特異な扁壺（以下、Ⅲ類）。他に例はないようである。

異形のものに、中国で繭形壺と呼んでいるものがある。林1976では埴に比定するが、日本的に俵形壺と呼ぶ。戦国晩期に陶器がある（文献394）。初現か。銅器は前漢早期の湖北・光化例（2-Cc1）が初出のようである。前漢早期でもやや遅れ、明帝末～武帝初とみる江蘇・徐州出土陶器（文献439）以後は、ほとんどすたれてしまう。

瓶の初現を飾るのは蒜頭瓶。口縁部を蒜形につくことからの命名で、筒状の中空の栓をしている例がある。体部は扁球状で、高台をもつ。戦国晩期頃が初現（文献394・429）で、秦の例（文献507）は多い。いずれも頸部の中程に突帯をめぐらせる（以下、Ⅰ類）。前漢初の河南・陝県出土銅器（2-Aa1）は頸部に突帯がない（以下、Ⅱ類）。前122頃の広州・南越王墓出土銅器（2-Ga1）も同巧。ただし、中国南半部はⅠ類の銅器（2-Ba1・F1）が前漢早期に残る。前122年頃から以後の例は知らない。

漢代で他に瓶とみるものに、口縁が外反するもの（以下、反口瓶）と、口縁が直立するもの（以下、直口瓶）とがある。反口瓶は前漢中期の河南・陝県出土銅器（2-Ib1）、武帝（前140～前87年）末頃とみる河南・鄭州出土陶器（2-Jd1）。体部は蒜頭瓶に似て、扁球状であ

る（以下、Ⅰ類）。反口瓶は後漢以降一時途絶え、南北朝から盛行する。

直口瓶の初出は、前漢中期とする湖南・劉彊墓出土銅器。伴出した他の遺物から前漢晩期と推定する。体部は扁球形で、高台がつく（以下、Ⅰ類）。2点のうち、外面をあまり飾らない1点（2-La1）は、内部に「竹籤」5本が残っていた。飲酒を競う「酒令籌」をいれた器の可能性もあるが、投矢とみて、投壺と報告しており、これに従う。ほぼ同じ銅器は、前漢晩期から新代まで存続する（2-Ma1・Ub1）。中国南半部に多いが、1点だけ陝西・長安城内（2-Ub1）から出土している。前漢晩期の山東・五蓮出土例（2-Pb1）や内蒙古出土例（2-R8・R9）は陶器で、器形が若干異なる。後漢に残るが、出土例はきわめて少なくなる。

壺・提梁壺 壺はバラエティに富む。以下では、頸が細長いもの（以下、細頸壺）、頸がそれ程細長くなくて、胴部が長いもの（以下、長胴壺）と、胴部が球状のもの（以下、球胴壺）に大別する。提梁壺もこれに準じる。鋤は方形壺である。

細頸壺は、戦国中期から秦代に、頸部がほぼ直で口縁がわずかに反る陶器がある（文献196・229・493）。前122年頃の広州漢墓出土陶器（2-Ga2）はその系譜をひくが、やや下肥れ（以下、Ⅰ類A）。前漢中期もやや遅い山東・微山出土の原始瓷器（2-Jb2）は、胴や頸が長くなる（以下、Ⅰ類B）。武帝（前140～前87年）末年頃とみる河南・鄭州出土陶器（文献276）は、口縁が屈折して立ち上がる、中国では盤口と呼ぶタイプの初出例。前漢晩期の山東・五蓮出土陶器（2-Pb2）も大差ない。球形胴で、高台が低いのが特徴（以下、Ⅲ類A）。

長胴壺は殷周代からある。前漢のものは、戦国期と同様に肩の張ったものが主流を占める。頸が長いのが典型（以下、Ⅰ類）だが、中国では罐に含める頸の短目のもの（以下、Ⅱ類）もある。Ⅰ類のうち、器身に文様を密に施した銅器は、前113年の満城漢墓M1出土例（2-H4）までで、以後はすたれる。突帯だけをめぐらす銅器は、戦国期にあり、前漢初の河南・陝県出土銅器（2-Aa2）につづく。前漢晩期の山東・五蓮出土銅器（文献366）や新代の四川・綿陽出土銅器（2-Tb1）が最終例で、以後途絶える。長胴壺Ⅱ類は、肩の張る陶器が戦国晩期頃にある（文献508）。前漢の景帝（前140年没）従葬坑出土陶器（2-Ac4）はほぼ同巧（以下、Ⅱ類A）。前113年の満城漢墓M1出土小型銅器（文献3）や新代の陶器（文献403）も大差ない。前漢中期の山東・劉髡墓出土銅器（2-Ia5）は、肩の張りがやや弱い。なお、新代の河南・洛陽出土陶器（2-Ua2）は、長胴壺の一種だが、味噌らしき「豉」の墨書があり、注目される。

球胴壺は、胴部の最大径がほぼ中位にあるもの（以下、Ⅰ類）と、下肥れのもの（以下、Ⅱ類）とがある。Ⅰ類は、既に戦国期にあり。文様を密に飾るものと、突帯だけのもの、素面のものがある。蓋は上面に複数の立飾をつけるのが原則。こうした伝統を残す銅器は前漢初の河南・陝県例（文献7）、前113年の満城漢墓M1出土例（2-H5）などである（以下、Ⅰ類A）。ただ、中国南半部では、前漢中期から晩期（文献4・199）まで、文様を密に施す伝統が残るが、蓋の残る例は1個の環だけを付す（以下、Ⅰ類B）。蓋に1個だけの環をもつ銅器は、すでに前313年の河南・中山国王墓例（文献28）にあり、前漢早期の湖北・襄樊例（2-Da4）や武帝末年頃の湖北・宜昌例（2-Fa2）につづくが、これらは提梁壺であった可能性があり、特殊例と考える。突帯だけを飾る銅器は前漢初（2-Aa3・Bc4）から新代までである。前漢中期の広州漢墓出土銅器（2-Kb3）以後は、蓋は立飾りがなく、1個の環だけ

を付す（Ⅰ類B）。

前122年頃の広州・南越王墓出土銅器（2-Ga4）は、胴が明らかに下肥れになったⅡ類の初現例。前漢中期から新代の諸銅器（2-Pa5・R11・Sa2・Ta2・Va4）につながる。後者では、蓋の残る例（2-Pa5・R11・Va4）はすべて立飾がなく、1個の環のみとなる（以下、Ⅱ類B）。密に文様を飾ったり、高台が八字状に高くなったりする（以下、Ⅱ類C）のは、中国南半部の地域色を示そう（2-N4）。

提梁壺は、戦国期の前313年の河南・中山国王墓から、銅製の長胴壺と球胴壺の二者が出土（文献28）。蓋は立飾がなく、1個の環があるのを原則とする。提梁長胴壺は前118～104年の満城漢墓M2出土銅器（2-H1）があるが、以後はすたれる。銅製の提梁球胴壺は前漢晩期の2例（2-La2・Ma2）。いずれも中国南半部の例で、密に文様を施す。後漢に入っても中国南半部では球胴の提梁壺が残る。

鋳 鋳は方形壺。戦国期に始まり、前漢・新代までかなりあるが、次第にすたれる。肩に環耳がつき、方形の高台と蓋を伴う。肩が張り気味か球胴なのが戦国期の特徴で、その伝統は前漢中期まで残る（以下、Ⅰ類）。他方、前漢に入ると体部が下肥れのものが登場する（以下、Ⅱ類）。蓋は戦国期では4個の立飾をつけるのが原則（以下、Ⅰ・Ⅱ類A）で、前漢初から前122年頃の広州・南越王墓までの銅器はⅠ類A（2-Da3・Ea1・Ga3）、Ⅱ類A（2-Ba3）ともその伝統をひく。密に文様を施したものは前122年頃の広州漢墓出土銅器のⅠ類A（文献4）のみで、素面が主となる。素面は戦国にもある。前漢中期の銅器（2-H3・Ja3）は、Ⅱ類であるが、蓋の残る例はない。いずれも素面。前漢晩期の銅器（2-Pa4・R10）は、体部が下肥れで、蓋は立飾がなく、中央に環1個をつけるものになる（以下、Ⅱ類B）。

罐・甌・瓮・罍 中国で罐と呼んでいるもののうち、基本的には口が大きいものを罐とし、口が小さいものは、中国でも使用している罍を用いる。ともに胴の長短、頸の長短や形状により区分する。甌は短胴罐、瓮は長胴罐の類になる。バラエティに富むが、陶器が主であり、大要を示すに止める。

甌は、樋口1967によると、高さよりも横が広がるもの。殷周代を通じてある。前122年頃の広州・南越王墓出土の銅甌と呼んでいるもの（2-Ga5）は、戦国中期の江蘇・淮陰出土銅器（文献229）と大差なく、環耳があり頸も短い、肩の張りが強くなる。3個の短脚がつき、温器である可能性もある。以後の例はない。なお甌に似るが、胴や頸がやや長いものを甗と呼ぶ銅器（文献243・429）が戦国晩期にあるが、以後はすたれる。

短胴罐は概して頸も短い。甌に似て肩が張るもの（以下、Ⅰ類）と、最大径が胴中位にあるもの（以下、Ⅱ類）、下肥れのもの（以下、Ⅲ類）がある。Ⅰ類は戦国中期の江蘇・淮陰出土陶器（文献229）にある。前122年頃の広州・南越王墓出土陶器（文献8）などにあるが、例は多くない。Ⅱ類は戦国中期かやや遅れる河南・洛陽出土黄釉陶器（文献508）が初出のようである。前漢では、前140年に没した景帝の従葬抗出土陶器（2-Ac5）がその系譜をひき、球胴に近い（以下、Ⅱ類）。Ⅱ類は後漢につづく。Ⅲ類は前漢晩期から新代の陶器（2-Oa7・Tb4）があるが、いずれも中国南半部から出土しており、地域性を示す。後漢につづく。

長胴罐は、短胴罐の分類にあわせ、肩が張るもの（以下、瓮と呼ぶ）、最大径が胴中位にあるもの（以下、Ⅱ類）に区分。下肥れのものは見当たらない。日本の典型的な甗のように、口

が胴と同じくらいに大きいものを、特に大口罐と呼ぶ。

瓮は、戦国晩期の四川・重慶出土陶器（文献242）があり、前漢初の山西・朔県出土陶器（文献363）、前漢晩期の四川・重慶出土陶器（文献129）も大差なく、肩の張りがまだ弱い。一方、前漢晩期の湖北・荊沙の出土陶器（文献171）は肩の張りが強い。両系統とも以後につづく。長胴罐Ⅱ類は前433年の湖北・曾侯乙墓（文献6）や戦国中期の河南・陝県墓（文献7）出土銅器がある。やや丈が高い。前漢前期には格好の例がないが、晩期にはいずれも陶器ながら、内蒙古・フフホト例（2-Pa6）、新代には江蘇・邗江例（2-Sa3）、四川・綿陽例（2-Tb3）がある。

大口罐は、秦代に陶器がある（文献509）。前漢初の河南・陝県出土陶器（文献7）も大差ない。前122年頃の広州・南越王墓出土陶器（文献8）などがある。

壺は、前漢晩期の四川・重慶出土陶器（2-Lb5）が初出のようである。短胴で、安定感がある。最大径はまだ肩近くにあるのが特徴である（以下、Ⅰ類A）。後漢には最大径が下端になる。
注器（鑊壺・水注） 鑊壺の祖型は、盃と呼ばれているもののうち、殷末・周初に登場する葉罐形の器に三脚をつけたものである。その差異は、後者が提梁を注口と同方向につけているのに対し、前者は棒状把手を胴部に注口と直角になるようにつけたもの、いわゆる急須に三脚をつけたものといえる。ともに注口は龍頭形である。葉罐形の盃は戦国晩期でも前半の湖北・黄岡出土銅器（文献239）が最終例である。鑊壺の初出は戦国晩期の湖北・襄樊出土銅器（文献238）で、前漢早・前期（2-Da5・F4）、前122年頃の広州・南越王墓（2-Ga6）及び前漢中期（2-Ja6）の諸銅器も大差ない。把手が中程で強く折れ、端が高くなるのが特徴（以下、Ⅰ類）。前漢前期の湖北・宜昌出土銅器（2-Ea5）、前漢中期の山東・栄城出土銅器（文献167）は、把手の曲折が弱く水平に近くなる（以下、Ⅱ類）。前漢前期には、広州漢墓出土銅器（2-F3）のように、曲折のない短い把手を斜めにつけたもの（以下、Ⅲ類）も登場。中期の湖南・資興出土銅器（2-Ka4）も同様である。Ⅲ類は後漢早期にも残る。前漢晩期の山東・済寧出土銅器（文献510）や湖南・張瑞君墓出土銅器（2-N5）、新代の江蘇・邗江出土銅器（2-Sa4）や前漢末～新代の陝西・長安城出土銅器（文献122）は、把手に曲折がなく、ほぼ水平となる（以下、Ⅳ類）。Ⅳ類は後漢で盛行。Ⅲ・Ⅳ類とも前漢中期・新代のものの一部に、注口が壺口縁より高くなるもの（2-N5・Sa4）があるが、中国南半部の地域色を示すようである。

なお、前漢早期の江蘇・徐州からは、棒状把手で、脚のない陶器（2-Ec3）が出土。鑊壺の簡略品であろうが、脚がないことから、これを水注Ⅰ類とする。この他に、前漢早期の江蘇・西山からは、甗の肩に注口をつけた陶鑊と呼ぶもの（2-Eb4）が出土しているが、以後にはつづかない。

以上の他に、前漢・新代にある特異な器種を3種あげておく。その一は、大口罐に蓋をかぶせた新代の河南・洛陽出土陶器（2-Ua5）。蓋に「飯」と墨書しており、おひつであったと推測できる。その二は、長円筒形の容器に蓋を伴う陶器で倉と呼んでいる。前漢晩期（文献171）や新代の例（2-Ua3）がある。後者には「栗」の墨書があり、穀物を貯蔵したものである。戦国晩期が初現か（文献394）。その三は、桶状の銅器（文献4・8）。中国南半部でも前漢代の広州あたりに特有のものらしい。大小がある。提梁桶もある。

c 煮沸具（付図3）

鍋・片手鍋・三脚鍋 鍋は、基本的には丸底で、口縁が外折する比較的浅目の容器。体部が開き気味で、把手のつかないもの（以下、Ⅰ類）と、体部が内弯して口縁で強く外接し、肩に環状把手をつけるもの（以下、Ⅱ類）とがある。他に、後述する無蓋鼎に似て、口縁に方形把手をつける鍋のうち、脚のないものは鍋として取り扱う（以下、Ⅲ類）。

Ⅰ類は戦国晩期の銅器が初出（文献394・429）のようである。前漢早・前期の銅器（3-Cb1・Ga1）はその系譜をひき、浅目で口縁もほぼ水平に短く折れる（以下、Ⅰ類A）。前113年の満城漢墓M1とその妻のM2出土鍍金銅器には、Ⅰ類A（3-H1）とともに、やや深目のもの（3-H2・H3）が出現する（以下、Ⅰ類B）。前漢中期（3-Jc1）や晩期（3-Qa1）の銅器も深目だが、口縁は上開きになる（以下、Ⅰ類C）。晩期の陝西・扶風出土銅器（3-Qc1）、新代の洛陽出土陶器（文献407）は体部の開きが大きい（以下、Ⅰ類D）。扶風例のみは半環耳がつく。Ⅱ類は中国南半部で出土する地域色の強いものである。初現は戦国晩期頃（文献241・437）。前漢では、前期の広州漢墓出土銅器（3-F1）、晩期の四川・重慶出土陶器（3-Lb1）などがある。いずれも口縁の立上がりはそれほど強くない（以下、Ⅱ類A）。新代の四川・綿陽出土銅器（3-Tb1）は口縁が立ち気味となる（以下、Ⅱ類B）。Ⅲ類は前113年の満城漢墓M1出土銅器（3-H5・H6）が初現。深目で体部が開き気味なのが特徴（以下、Ⅲ類A）。漢中期の広西・望牛嶺出土銅器（3-Ma2）は体部がほぼ直立する（以下、Ⅲ類B）。後漢にもつづく。同じく中期の四川・成都出土銅器（3-Mc1）は既述した鍋Ⅱ類Bに似て、口縁が折れて上開きのもの（以下、Ⅲ類C）。底に乳釘がある。新代の浙江・龍游出土鉄器（3-Tc4）は浅いもの（以下、Ⅲ類D）。

片手鍋は、前113年の満城漢墓M1（3-H4）とその妻のM2からの鍍金銅器が初出例。鍋Ⅰ類Aの体部に棒状把手を水平につけたもの（以下、Ⅰ類A）。前者には蓋がつく。前漢晩期とする陝西・漢中出土銅器（3-Uc1）は鍋Ⅰ類Dに棒状把手をつけたもの（以下、Ⅰ類D）で、鍋Ⅱ類に棒状把手をつけたもの（3-Uc2）も出土（以下、Ⅱ類）。前者に類した銅器は新代の洛陽出土例（文献512）もあり、漢中例も新代と推定する。Ⅱ類の銅器は、新代の四川・綿陽例（3-Tb3）や貴州例（文献511）などで、中国南方的特色と推測される。片手鍋Ⅱ類の系統をひくものは後漢にもあるが、他はすたれる。

三脚鍋は前漢中期の山東・栄城出土銅器（3-Kd5）が初現。深目で、口縁がわずかに外接し、体部に環耳をもつ。平底であるのも特徴（以下、Ⅰ類）。前漢晩期の山西・朔県出土銅器（3-Qa4）もほぼ同巧。後漢につづく。

釜 球状の体部に上開きの口頸部がつく器。釜と鍋の中間的形態である。肩に環耳がつく。環耳は2個のものと1個のものがある。ともに戦国中期でもやや遅れる四川・綿陽出土銅器（文献368）が初現。秦を経て前漢につづく。環耳が1個のもの（以下、Ⅰ類）は、前漢初の河南・陝県出土銅器（文献7）や前漢早期の湖北・襄樊出土銅器（3-Cb2）が最終例。環耳が2個だが、片方が小さい（以下、Ⅱ類）銅器は、前漢初の河南・陝県例（3-Aa1）、前漢早期の湖北・雲夢出土銅器（3-Ba1）や湖北・宜昌出土銅器（3-Ea2）、前漢前期の広州漢墓例（3-F3）、前122年頃の広州・南越王墓例（文献8）。陝県例（3-Aa1）は底に鉄製架が

銑着。2個の環耳が同大（以下、Ⅲ類）の銅器は、前漢早期の湖北・房県例（文献513）、前122年頃の広州・南越王墓例（3-Ga2）、前漢中期の山東・劉髡墓例（3-Ia2）、前漢晩期の四川・重慶例（3-Lb2）、新代の四川・綿陽例（3-Tb2）と河南・洛陽例（文献407）。後漢にも存続する。前漢中期の山東・劉髡墓例（3-Ia2）は、蓋を伴った稀な例である。このことから、釜は釜の一種だが、甗をのせるものではなかったと推測できる。なお、新代の四川・綿陽出土銅器（文献203）は、釜に棒状把手もつけた特殊品。類例はない。

^{カク} 鑊 前113年の満城漢墓M1出土銅器（3-H8）は「鑊」の自名器。盆に似るが頸部のくびれが大きい大型の鍋の類。前漢早期の類例は湖北・襄樊出土銅器（3-Da5）。前漢晩期の四川・重慶出土銅器（3-Lb4）は鑑とするが、形からすると鑊。これらより後の例はない。

釜・三脚釜 釜は甗をはめ込むため、口はほぼ直口で、肩に環耳をもつのが通例。体部は、典型例は球形だが、長胴のものもかなりある。それぞれを球胴釜、長胴釜と呼ぶ。ともに胴部に、竈にかけるときのかかりとする鐐があるものと、ないものがある。なくても竈にはかかる。底に架（五徳）が銑着している出土例（3-Aa2）もある。架はすでに戦国期前313年の河南・中山王墓から出土している（文献28）。

球胴釜は、鐐のないもの（以下、Ⅰ類）が戦国中期でやや遅れる時期（文献368）、鐐付き（以下、Ⅱ類）が戦国晩期（文献394）には出現している。丸底と平底とがある。前漢の銅器でみると、鐐のないⅠ類は前漢初の河南・陝県例（文献7）と湖北・雲夢例（3-Ba2）、前漢前期の湖北・宜昌例（3-Ea4）。以後の例はない。いずれも口縁が外反し、環耳も把手状にするのが特徴。河南でも出土しているが、既述した鍋Ⅱ類と通じ、中国南半の地域色が濃い。鐐付きのⅡ類のうち、丸底のものは前漢初の河南・陝県例（文献7）、前漢前期の湖北・襄樊例（3-Da4）、前漢中期の山西・朔県（3-Ja3）にあるが、以後はすたれる（以下、Ⅱ類A）。平底のものは前漢初の河南・陝県例（文献7）、前漢前期の湖北・宜昌例（3-Ea5）以後、前漢晩期の陝西・西安例（3-Qb2）、新代の江蘇・邗江例（文献194）や湖北・襄樊例（文献174）までである。後漢にもつづく。

長胴釜は、鐐のないもの（以下、Ⅰ類）が前313年の河南・中山国王墓（文献28）から出土している程度で、戦国期の例は乏しい。中山国王墓例は平底で、肩に強い稜がある。前漢では、Ⅰ類は少し形が異なるが、前期の江蘇・徐州楚王墓出土銅器（文献433）がある。以後は鉄器に限られる。中期の陝西・西安例（文献270）、晩期の陝西・隴県例（文献268）、新代の陝西・西安例（3-Vc3）である。いずれも平底で肩が張り、口縁が立ち上がる（以下、Ⅰ類B）。後漢にも、一部残る。Ⅱ類は前漢初の河南・陝県出土銅器（3-Aa2）、陝西・景帝（前140年没）従葬抗出土鉄器（3-Ac3）が初出のようである。前者は丸底（以下、Ⅱ類A）で鉄製架が付着する。後者は平底（以下、Ⅱ類B）である。Ⅱ類Aは後につづかない。Ⅱ類Bの銅器は前113年の満城漢墓M1例（3-H7）、前漢中期の河南・陝県例（3-Ib4）や湖北・員陬例（文献192）、前漢晩期の陝西・西安例（3-Qb3）、新代に入る江蘇・邗江例（3-Sa5）があり、後漢にもつづく。他に、長胴釜と同様に肩が張るが、無頸か極めて頸の短い鉄器が、前漢中期や新代の浙江・龍遊（3-Lc3）、新代の陝西・西安（3-Vc4・Vc5）から出土している（以下、Ⅲ類）。後漢につづく。これらの例を含めて、鉄製釜はいずれも金属製甗を伴出していない。釜単独で使ったか、陶製の甗を使用したことになる。

三脚釜は前漢前期の広州漢墓出土銅器（文献4）や新代の山東・安丘出土銅器（3-Vb6）。鐙があり、しかも方形把手がつく点は釜と鼎の折衷といえる。後漢にもあるが極めて少ない。

甗 甗と鬲を一体にした獻は、殷以後戦国中期（文献4・229）まで残る。その甗は口縁に方形把手をつける。戦国中期もやや遅れる球胴釜Ⅰ類Aに伴う四川・綿陽出土甗（文献368）は、伴出の球胴釜と同様な、環状の把手をつける（以下、Ⅰ類）。前漢初の河南・陝県出土銅器（文献7）も同様だが、以後はない。前313年の河南・中山国王墓出土長胴釜Ⅰ類に伴う甗（文献28）や戦国晩期の河南・陝県出土球胴釜Ⅱ類に伴う甗（文献7）は、方形把手にかえて部部上半に環耳がつく（以下、Ⅱ類）。前者は丈が高いが、後者は丈が低めとなり、前漢代につづく。器形は、既述した盆に似ており、新漢・新代を通じて大きな変化はない。底の透しは、小円孔を多数穿つもの（以下、Ⅱ類A）、長孔を放射状に配するもの（以下、Ⅱ類B）、底を4区に区切り、長孔を放射状に配したもの（以下、Ⅱ類C）と、四区に横・縦溝を交互に配するもの（以下、Ⅱ類D）などがある。Ⅱ類A・B・Cは戦国期からある。前漢・新代の銅器でみると、Ⅱ類Aは前漢前期の広州漢墓例（3-F6）、前113年の河北・満城漢墓M1例（3-H7）、Ⅱ類Bは前漢初の河南・陝県例（文献7）、前漢中期の河南・陝県例（3-Ib4）や湖北・貝冢例（文献192）、前漢晩期の陝西・西安例（3-Qb3）で以後につづかないが、陶器ではⅡ類Aは残る。Ⅱ類Cの銅器は、若干の差異があるが、前漢中期の河南・陝県例（文献7）、前漢中期の山東・劉髡墓例（文献226）、前漢晩期の内蒙古フフホト例（文献427）などで、後漢にも一部残る。Ⅱ類Dは前漢早期の湖北・光化出土陶器（文献219）が初出のようだが、銅器は前漢晩期の湖北・荊沙例（3-Ob3）や陝西・西安例（3-Qb2）、新代の江蘇・邗江例（3-Sa5）や湖北・襄樊例（文献174）があり、前漢晩期・新代の主流を占める。環耳の省略もⅡ類Dから始まる。後漢にもつづく。

鍑 鍑と呼んでいるのは鍋を深くしたような器である。多くは底に煤がつく。中国北方の遊牧民である匈奴や鮮卑などに用いられたもので、春秋期から北魏・北齊までつづく（文献200・490）。バラエティがあり、代表例を取り上げる。秦～前漢とみる寧夏・固原出土銅器（3-Ae3）は筒状の深い器であり、平底。肩の張りが弱いのが特徴（以下、Ⅰ類A）。前漢中期相当とみる内蒙古出土銅器（3-Gb3）は、底がすぼまり、高台がつく（以下、Ⅱ類）。

鼎 方形把手・三脚付の鍋である。樋口1967によると、殷・西周には銅製の蓋はなく（以下、無蓋鼎）、春秋期から銅製蓋付き（以下、有蓋鼎）が登場してくる。有蓋鼎は、蓋が扁平なもの（以下、Ⅰ類）と半球状のもの（以下、Ⅱ類）、無蓋鼎は把手が口縁端につくもの（以下、Ⅰ類）と口縁よりやや下につくもの（以下、Ⅱ類）に区分する。

有蓋鼎は、Ⅰ・Ⅱ類とも戦国期を通じて存在し、前漢代にも残る。蓋には複数の立飾があるのが伝統であり、脚の長いのが古調。銅器でみると、Ⅰ類は前漢初の河南・陝県例（3-Aa5）、前漢早期の湖北・襄樊例（文献174）、前113年の河北・満城漢墓M1例（3-H10）、前漢中期の山東・栄城出土例（3-Kd6）がある。以後にはつづかない。Ⅱ類は前漢各期（3-Aa6・Ba4・Da6・Ed10・F11・Ga6・Ib5・Ob6・R5など）と新代にあるが、大きな変化はない。概して脚は短い、中国南半部では脚が長いものが前漢中期や晩期（文献4・8）、新代（文献393）まで残る。後漢には激減する。

無蓋鼎Ⅰ・Ⅱ類とも戦国期にあるが、Ⅱ類は中国南半部でしか出土しておらず、地域色を示

す。前漢のⅠ類は、前漢初の河南・陝県出土銅器（3-Aa4）、陝西・景帝（前140年没）従葬抗出土鉄器（文献405）、前113年の河北・満城漢墓出土銅器（3-H9）。ともに深目だが、脚は戦国期より短くなっている（以下、Ⅰ類B）。広州の前漢前期や前122年頃の広州・南越王墓出土銅器（3-F8・F9・Ga4）は、Ⅰ類でも口縁が外折して立ち上がる特異なものである（以下、Ⅰ類C）。地域色を示す。以後はすたれてしまう。おそらくⅠ類は、前述した三脚鍋や鍋Ⅲ類に変わっていくのであろう。無蓋鼎Ⅱ類は、前漢前期の湖南・資興出土銅器（3-Ed7）や広州漢墓出土銅器（文献4）、前122年頃の広州・南越王墓出土銅器（3-Ga5）。以後は途絶える。

温酒樽 円筒形の容器で、身に三脚と環耳、蓋に複数の立飾をつけるのが典型（以下、Ⅰ類）。三脚付き盤を伴う例が多い。同形の漆器は主に化粧具なので省略し、「温酒樽」と自名があった銅器をここでは取り上げる。銅器の最も古い例は前漢中期の広州漢墓例2点。うち1点が自名器（3-F12）。後漢につづく。一方、前漢晩期には、湖南・永川例（文献199）のように、蓋を山形につくり、頂部に鳥を飾るものが登場する（以下、Ⅱ類）。新代の江西・南昌例（3-Td7）なども同巧。中国南半部に特有で、地域色を示す。後漢にもつづく。

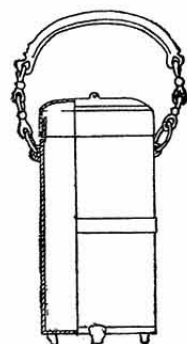
なお、温酒樽に類した銅器だが、提梁の細身の容器が、前漢中期の山東・栄城（第16図1）、前漢晩期～新代の内蒙古（第16図2）や西安・長安城（第16図3）から出土している（以下、提梁筒）。旅具か。樋口1967によると、西周に例がある。後漢にはつづかない。

鑊尊 壺形の器に三脚がついたもので、自名器もある（文献43）。提梁が主と思われるが、腹部に棒状把手をつけたものもある。祖形は戦国中期から晩期にある鼎の一種で、頸が立ち上がる類（文献196・506）にあり、その方形把手を環耳・提梁としたのが鑊尊になろう。

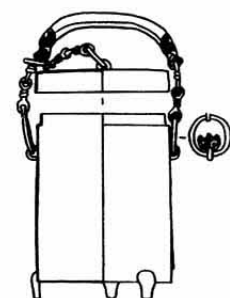
鑊尊の初現は前漢初の河南・陝県出土鉄器（3-Aa7）。戦国期のものより、頸が長く、脚は短い（以下、Ⅰ類）。類例は前114年の河北・常山国王墓出土銅器（文献162）や、前漢晩期の湖南・湘郷出土鉄器（文献516）。前漢中期には提梁を伴う銅器が、河南・陝県（3-Ib6）、江西・南昌（文献531）にあり、晩期の四川・重慶例（3-Lb7）、湖南・張端君墓例（3-N5）、山西・朔県例（3-Qa6）につづく。頸はやや長くなる（以下、Ⅱ類）。新代頃の江蘇・邗江出土鉄器（3-Sa6）は鑊尊の三脚を高台に替えた可能性がある（以下、Ⅲ類）。重慶例では下盤が伴った可能性が高い。鑊尊に棒状把手をつけたもの（以下、Ⅳ類）は、前漢前期の湖北・光化出土銅器（文献219）が初出。類似の銅器は前漢晩期の湖北（3-Ob4）や広西（3-Ma3）にあり、後漢にもつづくが、中国北半部の出土例はなく、地域色を示す。

d 雑器（付図3）

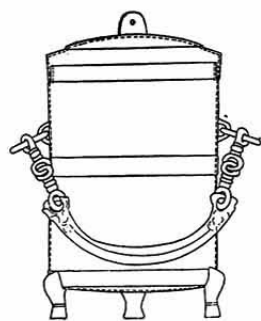
熨斗 前漢晩期の湖南・張端君墓出土銅器（3-N7）、湖南・永川出土銅器（3-Oa6）が初



1 山東・栄城出土
（前漢中期 文献167）



2 内蒙古出土
（前漢晩期 文献30）



3 西安・長安城出土
（前漢末～新 文献122）

第16図 銅製提梁筒
1 : 6

現のようである。前者は自名器。ともに平底で、中空の棒状把手をつけている。短柄だが、木柄を差し込んだと推定できる（以下、Ⅰ類）。前漢晩期の山東出土銅器の把手は長さ約22cm中実の棒状把手（文献510）。柄の茎部や先端につくり出しがないのが特徴（以下、Ⅱ類A）。

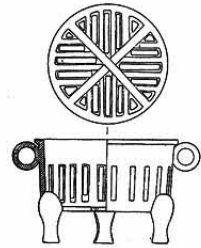
爐 方爐と円爐があるが、方爐はほぼ前漢に限られるので割愛し、円爐とその下盤のみを取り上げる。円爐はすでに戦国時代には類例がある。多数の透かしをあけた爐（以下、内爐Ⅰ類）は、前118～104年の河北・満城漢墓M2出土銅器（第17図1）、前漢中期の山東・栄城出土陶器（第17図2）があり、後者では盤Ⅰ類の下盤が伴う。新代の江蘇・雋江出土鉄器（第17図3）は、透かしを底にだけあけたもの（以下、内爐Ⅱ類C）。これらの内爐は、鍋などを温めたのであろうが、以後は次第にすたれる。

燈 燈は、前漢代には油用と、皿に針状の突起があるため蠟燭用（以下、蠟燭燈Ⅰ）と推定されるものとがある。それぞれに、安置するものと、持って歩くいわゆる行燈とがある。いずれもバラエティに富む。後漢に入るとかなりシンプルになる。本稿では、以後も出土例が多い、油用・安置式の豆（高杯）形のものを中心に既述し、他は割愛する。

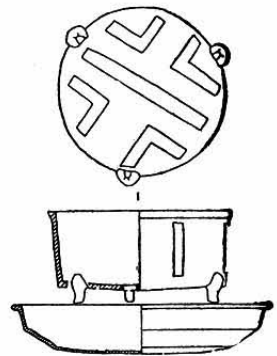
豆形のもの（以下、豆燈）は、食膳具の豆（高杯）とは、小形である点や脚が細長い点で区別する。杯部と脚部を分離したもの（以下、盞燈）は、低目の盞燈台をもつものや連枝燈のように高いものも含む。供膳具の碗や杯を燈にしている場合もあるが、確認している例は少ない。

豆燈は、前漢代には脚が極めて細長く、油皿が大きく扁平なものである。脚の中程に太い節があるのも特徴である（以下、Ⅰ類A）。この器形では蠟燭用の針があるのが主だが、針を確認できない例を油用とみる。古いのは前116年銘の河北・満城漢墓M1出土銅器（3-H11）で、前漢晩期頃の山東・五蓮出土鉄器（文献366）や内蒙古出土陶器（3-R8）もある。満城漢墓M1例は皿と脚を別造りにして鋳で固定している。Ⅰ類Aは、後漢にはⅠ類Bに変化する。一方、前113年の満城漢墓M1出土陶器（3-H13）は、丈が低目で、半球状の身に太目の足を持つ新器形（以下、Ⅱ類A）。燈とみている。前漢晩期の内蒙古出土陶器（3-R7）も同類。ほぼ同形品で蠟燭用の針をもつ例に対して、油用とみる。Ⅱ類は後漢から次第に盛行する。

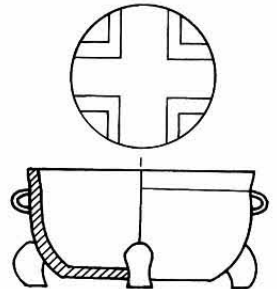
盞燈は、前113年の満城漢墓出土銅器（3-H12）。小型品では口縁に2個の環状把手が水平に付く。盞としてしているが、後述する三国時代・西晋の例からみて、燈盞の可能性が高い（以下、Ⅰ類A）。ただし連枝燈があった形跡はない。行燈内においたものか。前漢中期とする広州漢墓出土銅器（3-Kb9）は、半球状の皿の下に柱状突起がつく（以下、Ⅱ類）前漢末～新代の陝西・長安城出土銅器（3-Ub7）は、底の中央に中空の柱がある。温器とみて盆に分類しているが、後述する西晋代の類例から、中空柱に、別造りの盞燈Ⅱ類をはめこんだと推定される（以下、Ⅱ類）。



1 河北・満城M2銅爐
(前118年～104年頃 文献3)



2 山東・栄城陶爐
(前漢中期 文献167)



3 江蘇・邗江鉄爐
(新代 文献194)

第17図 前漢・新代の爐
1・3 1:8 2 1:10

ii 後漢

a 供膳具・水器（付図1）

飲器 前漢・新代からつづくのは、高足杯Ⅰ類や把手付杯Ⅱ類Bである。高足杯Ⅰ類は広西・貴港出土銅器（文献244）程度で、例は激減する。把手付杯Ⅱ類Bは後漢に比定している広西・鍾山出土銅器（4-Kc1）。把手付杯Ⅰ類は、後漢に入ると、杯身が総じて低くなる。いずれも陶器で、前・中期の湖南・資興例（文献227・4-Fa1）や後期の広州漢墓例（4-Ka2）のように、低い脚を残すものや蓋のつく例はあるが、立飾は消失する（以下、Ⅰ類B）。早期の湖南・資興例（4-Aa1）、前期と後期の広東・広州漢墓例（文献4）のように、把手が板状になるものもある（以下、Ⅰ類C）。いずれも湖南や広東など中国南半部からの出土例で、地域色を示す。後漢前期には、広西・平樂出土銅器（4-Ca1）のように高台のない丸底風が登場。環状把手で突起をもつ（以下、Ⅲ類）。把手付杯は、中国北半部では一時すたれていたのかもしれない。長杯・角杯の例は知らない。

耳杯は、前漢・新代と同様に耳が半月形だが、後漢早期からは耳が上向きでなく水平になる（以下、Ⅱ類）。前期の内蒙古出土陶器（4-Ab2）が初出で、中期の滑石製品（4-Fb2）や陶器（4-Gb1）、晩期の銅器（4-Lc1）もほぼ同巧。後漢晩期～三国時代とする四川・開県出土銅器（文献250）も同巧で、三国時代に降らず、後漢晩期頃と推測する。133年頃の雲南・昭通出土銅器内には鶏骨（文献517）が残っており、盤としても使用されたことがわかる。

杯・碗・鉢 杯では、新代に登場した酒罎の小型品である高台付杯Ⅱ類が、後漢にも盛行するが、以後は途絶える。早期の湖北・蕪春の銅器（4-Ba2・Ba3）、133年の湖南・資興M204墓出土陶器（文献227）、中期の湖南・大庸出土陶器（4-Fb5）、後期の広州漢墓出土銅器（4-Ka4）、晩期の湖南・資興出土銅器（4-Lb5）。133年の湖南・資興出土陶器は内に陶勺（散蓮華）が入っており、羹などにも用いられたことを示すが、小型品であり、本来は飲酒器とみるべきであろう。

高台付杯Ⅰ類Bに似るが、平底（以下、平底杯Ⅰ類）の陶器（4-Fa4）が後漢中期の湖南・資興から出土。晩期の資興出土陶器（文献227）も大差ない。中期の広西・合浦出土銅器（4-Db2）はやや開き気味である（以下、平底杯Ⅱ類）。新代に登場した平底杯Ⅲ類は、後漢中期の広西・合浦出土陶器（4-Db1）や晩期の湖南・資興出土陶器（4-Lb4）にある。類例は少なく、三国時代から盛行する。

高台付碗のうち、Ⅰ類は後漢に入ると、深目で高台も高めのもの（以下、Ⅰ類B）も出現。早期の湖北・宜昌出土陶器（4-Bc5）、晩期の河南・洛陽出土銅器（4-Ja4）や広西・浦北出土銅器（4-La6）などである。Ⅱ類は、前漢晩期・新代のⅡ類Aに比して、体部が直立気味となる（以下、Ⅱ類B）。前期の広州漢墓出土銅器（4-Cb4）や内蒙古出土陶器（4-Ab6）である。中期には、湖南・資興出土陶器（4-Fa7）のように、口縁下がくびれたものも出現する（以下、Ⅱ類C）。後述する鉢Ⅱ類Cを小さく高くしたようなものである。ただし、以後にはつづかない。後期には、江南・南康出土銅器（4-Kb5）のように、体部が直立気味で浅目のもの（以下、Ⅱ類D）が登場し、三国時代に展開する。晩期の広西・浦北出土銅器

(4-La7) は豆とするが、高台付碗Ⅱ類Dの地域色を示すのであろう(以下、Ⅱ類D')。

丸底碗は、前漢代からある深目のⅠ類が後漢にも存続する。前期の広州漢墓出土銅器(4-Cb3)や、中期の湖南・大庸出土鉄器(4-Fb6)。平底碗は、後漢に入ると、高さが口径の半分程のもの(以下Ⅱ類)が出現する。早期の湖南・資興出土銅器(4-Aa5)、前期の広西・平樂出土銅器(4-Ca4)である。三国時代から盛行する平底碗Ⅲ類Aの祖形の一つになる。

鉢では前漢からつづく高台付鉢Ⅰ類の銅器が後期の広州漢墓から出土(4-Ka6)。環耳をもつ点は特異で、地域色か。前漢中期に登場したⅡ類Cは、後漢早期の湖南・資興出土陶器(4-Aa7)があるが、以後は途絶える。前期の浙江・龍游出土銅器(4-Cc5)は、体部が開き気味である(以下、Ⅱ類D)。後期の広州漢墓出土銅器(4-Ka7)もほぼ同巧。陶器では、後期の山東・淄博例(文献522)、晩期の河南・洛陽例(4-Ja5)や山西・夏県例(4-Hc6)があり、以後にもつづく。平底鉢や丸底鉢の例は知らない。

盂・鉄鉢形 盂は後漢にはバラエティに富む。後漢中期の湖南・大庸出土陶器(文献108)は、深目なのが特徴(以下、Ⅱ類)。早期や中期の湖南・資興出土陶器(4-Aa9)は、Ⅱ類に蓋を伴うもので、新しい器形の登場を示す。早期の湖北・宜昌出土陶器(文献218)は、三脚をつけた特殊品で、前後の時期に類例がない。晩期の湖南・資興出土陶器(文献227)は高台を伴う。

鉄鉢形は、後漢中期の河北・蠡県出土陶器(4-Ha4)が初出例。やや浅目で、小さな平底である(以下、Ⅰ類)。報告書では釜としている。体部が内弯するのは、本来は鍋的な用途をもったことを窺わせる。

魁 前漢晩期に出現した魁Ⅰ類Aは、後漢晩期まで存続する。早期の陶器(4-Aa10)、中期の陶器(文献216・363)、晩期の陶器(4-Ja8)がある。把手の竜頭を簡略して鍵状につくるⅠ類Bは、118年の広東出土陶器(文献518)が初出。中期の陶器(4-Fb10)や晩期の陶器(文献420)もある。山東・寿光出土銅器(4-Jc7)は把手が高い(以下、Ⅱ類B)。後漢初とするが、他の銅器からみても晩期頃となる。

酒甕 前漢晩期に登場した器種で、後漢に入ると、高台はより高くなる(以下、Ⅱ類)。銅器は、早期の湖南・資興例(4-Aa8)や湖北・蕪春例(4-Ba6)、前期の浙江・龍游例(4-Cc6)、後期の広州漢墓例(4-Ka8)、晩期の四川・綿陽例(4-Lc8)がある。以後はすたれる。

盤・沐盤・托 30cmを超える大盤で、前漢・新代から続くのはⅠ類。いずれも最大40cmほどで、前漢・新代のような特大品はない。環耳付きのⅠ類Aは、早期の湖北・蕪春出土銅器(4-Ba8)が最終例。環耳のないⅠ類Bは、152年の河南・洛陽出土銅器(4-Ia9)や陶器、晩期の山西・夏県出土陶器(文献408)で、類例は少なく、以後は途絶える。大盤ⅤA類は、後期の河南・洛陽出土陶器(文献519)や179年の洛陽・王当墓出土陶器(4-Kd11)で、食器をのせた円案であらう。

口径が20~30cmほどの中盤で、前漢・新代からつづくのはⅠ類B、Ⅳ・Ⅴ類で、出土例も比較的多くなる。Ⅰ類Bは、132年頃の河南・襄城出土陶器(4-Gb2)、後期の山東・済寧出土銅器(文献161)、晩期の湖南・資興出土銅器(4-Lb3)や江西・南康出土銅器(4-Kb3)

など。三国時代初に残る。深目のものは鉢とすべきかもしれない。Ⅳ類は、いずれも陶器で、早期の内蒙古（文献30）、中期の湖南・資興（文献227）、晩期の河南・洛陽（4-Ja2）出土品がある。深目のものは鉢とすべきかもしれない。三国時代につづく。前漢晩期に出現する扁平なⅤ類は、後漢とそれ以後に多くなる。後漢例はいずれも陶器で、早期の内蒙古（4-Ab3）や中期の広西・合浦（4-Db1）などから出土。後者の盤上には平底杯Ⅲ類がのっており、承盤であったことがわかる。ただし、杯を承ける突帯はない。

口径15cm前後の小盤は、Ⅰ類Bとして中期の湖南・大庸出土陶器（文献168）、Ⅱ類として晩期の四川・綿陽出土銅器（4-Lc2）や四川・開県出土銅器（文献250）、Ⅴ類としては中期の湖南・資興出土陶器（4-Fb3）などがある。Ⅱ類の2例は、薫爐を伴出していないので、その承盤ではない。後漢に入ると、Ⅴ類に似るが、体部に丸味をもつものが登場する。早・中・晩各期の湖南・資興出土陶器（4-Aa4）などであり、平底であるのが特徴（以下、Ⅵ類A）。

托らしきものは、中盤Ⅰ類Bにあたる132年の河南・襄城出土陶器（4-Gb2）、中盤Ⅳ類にあたる晩期の河南・洛陽出土陶器（4-Ja3）で、内底に近い突線がめぐる。初現例であるが、大きさからみて杯・碗用ではなく、爐などの下盤と推測する。

盆・銅・洗 盆は、新代に出現したⅡ類の銅器が、後漢中期頃の湖北・宜昌（4-Fc8）から出土しているが、以後は途絶える。

銅は、前漢中期に登場する浅銅Ⅱ類Bの系譜をひくものが、晩期の広西・浦北出土銅器（4-La9）にあるが、体部が直立気味となる（以下、Ⅱ類C）。前漢からつづく深銅Ⅰ類は、後漢早・中期の青海・上孫家寨出土銅器（4-Dc9）、中期の河南・新安出土銅器（4-Gc5）や陝西・漢中出土銅器（文献253）がある。深銅Ⅱ類は、後期の広西・南康出土銅器（4-Kb9）で、後漢晩期頃と推定する河南・鞏県出土銅器（4-Mb10）もほぼ同巧。ともに三国時代にもつづく。

洗は前漢以来の浅洗と深洗が後漢にも存続する。口縁の立ち上がりが弱い深洗Ⅰ類Aは、後漢早期の湖北・蕪春出土銅器（4-Ba7）、中期の湖南・資興出土銅器（4-Fa11）や湖南・南岳出土銅器（文献153）、後期の江西・南康出土銅器（4-Kb10）や広西・浦北出土銅器（4-La12）までつづく。106年の山東・章丘出土銅器（4-Ga7）や晩期の四川・開県出土銅器（文献250）は、口縁の立ち上がりが強くなる（以下、Ⅰ類B）。後者で出土した他の銅器は、口縁下がくびれる（以下、Ⅱ類）。地域色が強い。三国時代にもつづく。浅洗は、後漢に入ると環耳はなくなり、口縁の立ち上がりがやや強くなる（以下、Ⅰ類B）。早期の湖南・資興出土銅器（4-Aa11）、中期の湖南・衡陽出土銅器（4-Da7）がそれ。一方、中期には、山東・章丘出土銅器（4-Ga6）のように、口径が38cm、深さが10cm前後の大型品で、かなり浅目のものが登場する。口縁の立ち上がりは強いのも特徴（以下、Ⅱ類）。山東・章丘では同巧の深洗Ⅱ類と共伴しており、浅洗Ⅱ類は沐盤のような用途を果たしたのではないかと推測できる。浅洗Ⅱ類は後漢晩期頃と推測する河南・鞏県出土銅器（4-Mb11）にもあり、以後にもつづく。

盒・豆 盒Ⅰ類は前漢で終わる。盒Ⅱ類は後漢中期の陶器（文献30）などがあるが、例が激減する。豆は後漢早期や中期の陶器（4-Gb3）があるが、これも極めて少ない。盒・豆ともに、三国時代や西・東晋代には一時的にすたれるのかもしれない。

b 貯蔵具・注器（付図5）

瓶・細頸壺 前漢晩期に登場した直口瓶Ⅰ類が、後漢後期の広東・広州漢墓出土銅器（5-Ka1）にある。この時期の広東では同巧の陶器もある。西晋までつづく。

細頸壺は、反口のⅠ類が67年の江蘇・邗江出土陶器（5-Bb1）にある。球胴に近いのが特徴（以下、Ⅰ類C）。中期の河北・蠡県出土陶器（文献345）もほぼ同巧。前漢中期に出現した盤口の細頸壺Ⅲ類Aは67年の江蘇・邗江例（5-Bb2）に残る。

壺・提梁壺・鈎 長胴壺は好例がない。球胴壺は球胴のⅠ類と下肥れのⅡ類がある。Ⅰ類は、中期の山西及び山東出土陶器（5-Hb2・Ⅰd3）のように口縁がはっきり盤口となる（以下、Ⅰ類C）。中期の広西・合浦出土陶器（5-Db1）や湖南・大庸出土銅器（5-Fb1）、晩期の江西・南康出土銅器（5-Kb3）などで、銅は算盤球状で、高台が特に高い（以下、Ⅰ類D）。中国南半部の地域色を示そう。ほぼ同巧の四川・開県出土銅器（5-Ma1）や河南・鞏県出土銅器（5-Mb2）は、後漢晩期～三国時代とするが、他の伴出した容器からみて、後漢晩期が妥当と考える。後者は中国南半部からの影響と理解できよう。いずれも陶器だが、中期の河南・新安例（5-Gc1）や山西・朔県例（文献363）、晩期の山東・済寧例（5-Ⅰd2）や河南・洛陽例（5-Ja2）は、直口長頸で高台が特に高い（以下、Ⅰ類E）。中国北半部の地域色か。Ⅱ類は67年の江蘇・邗江出土陶器（5-Bb4）、中期の湖南・大庸出土釉陶（5-Fb2）。

提梁壺は、中国南半部の出土例だけである。球胴壺が湖南・蕪春出土銅器（5-Ba3）や後期の広東・広州漢墓出土銅器（5-Ka2）、晩期の四川・綿陽や広西・浦北出土銅器（5-Lc1・La2）に残るが、三国時代にはすたれる。

鈎は、下肥れのⅡ類の系統が晩期の四川・開県出土銅器（文献250）などがある程度で、激減する。ただし、三国時代以降にも細々と残る。

唾壺 後漢に出現する新器種で、三国時代から盛行する。胴は下肥れ、頸は短く、口が大きいのが特徴。152年の河南・洛陽出土陶器（5-Ⅰa4）が初出例。頸が極めて短いのが特徴（以下、Ⅰ類）。唾壺の祖形は球胴壺Ⅱ類であり、中期の球胴壺Ⅱ類とした湖南・大庸出土釉陶（5-Fb2）は唾壺かもしれない。

罐・瓮・壺 罐は、前漢にあった短胴罐、長胴罐、大口罐が後漢にもつづく。いずれも陶器。短胴罐のうち、肩の張るⅠ類は晩期の湖北・宜昌例（5-Lc5）など、球形胴のⅡ類は前期の内蒙古例（文献30）や湖北・宜昌例（文献218）、中期の広西・合浦例（文献185）など、胴が下肥れのⅢ類は広西・合浦例（5-Db5）。Ⅲ類の類例は少ないが、以後にも残る。

長胴罐も陶器。このうち、肩の張りが強く、丈の長い瓮は、105年の湖南・南岳例（5-Ea4）から、晩期の河南・洛陽例（5-Ⅰa5）や江西・南康例（5-Kb5）まで、中国全土で後漢を通じて普及する。以後にもつづく。最大径が胴中位にある長胴罐Ⅱ類は、67年例（5-Bb5）などがある。大口罐も中・晩期例があり、以後にもつづく。

壺は、いずれも陶器で、前期の内蒙古例（5-Ab1）や152年銘のある河南・洛陽例（5-Ⅰa1）などがある。最大径が下端にある平底で、より安定感のあるものになる（以下、Ⅰ類B）。後者は墨書があり、当時は「瓶」と呼ばれ、神薬をいれたことがわかる。以後にはつづかない。

注器（鑊壺・水注・虎子） 鑊壺は前漢中・晩期の伝統をひくⅢ・Ⅳ類が残る。Ⅲ類は、後

漢早期の湖南・資興出土銅器（5 - Aa2）で、以後は途絶える。Ⅳ類は、中期の湖南・南岳出土銅器（5 - Ec3）、湖南・衡陽出土銅器（5 - Da2）、湖南・大庸出土銅器（5 - Fb3）、晩期の江西・南康出土銅器（5 - Kb4）がある。中期の湖南・大庸出土陶器（文献168）や、中・晩期の湖南・資興出土陶器（5 - Lb3）もこの類。

なお、133年頃の雲南・昭陽出土銅器（文献517）や、175年の山西・離石出土銅器（5 - Jb3）は、大きくみれば鑊壺Ⅳ類だが、胴部に鐐をもったり、注口と把手が同方向であるなど中国辺境部の特殊性で示す（以下、Ⅴ類）。

水注は、鑊壺を簡略化したⅠ類が、中期頃の湖南・衡陽出土陶器（5 - Da3）や湖南・南岳出土陶器（5 - Ec4）にある。中期の湖南・資興出土陶器（5 - Fa4）は注口だけで、把手のつかない新器形（以下、Ⅱ類A）。初出例である。晩期の湖南・資興出土陶器（5 - Lb4）も同様だが、三脚がつく（以下、Ⅱ類B）。

虎子は、尿瓶とみているが、日本ではこの系列の平瓶を注器と考えており、ここで少し触れておく。虎子の初現例は、戦国期（文献359）の虎形品だが、出土例が幾分か増えるのは後漢中期の湖南・資興出土陶器（第20図1）あたりからである。資興例は、球状の平底の器に大きめの口をつけたもので把手はない（以下、Ⅰ類A）。高さ18.2cm。同様だが、96年の広東・仏山出土陶器（文献520）はやや口が小さく温壺と呼んでいる。高さ18cm。三国時代につづく。

前漢・新代に登場した特殊な陶器で、おひつとして使用した広口罐は中期の湖南・資興例（文献227）、その類形で口縁を二重にしたもの（以下、二重口縁罐）が中・晩期の湖南・資興例（5 - Aa4）にあり、穀物をいれた倉は中期（5 - Gc5）、後・晩期（文献253・336）にも存続する。いずれも細々と以後にも出土する。三国時代にもつづく。

c 煮沸具（付図6）

鍋・片手鍋・三脚鍋 鍋は、前漢晩期・新代からの浅い半球状のⅠ類D、深目で口縁下がくびれるⅡ類、方形把手をつけたⅢ類が残る。Ⅰ類Dは中期の河南・新安出土銅器（6 - Gc1）や晩期の河南・洛陽出土銅器（6 - Ja1）。晩期と推定する河南・鞏県出土銅器（6 - Mb1）は体部が内弯気味で、口縁の立ち上がりも大きくなる（以下、Ⅰ類E）。Ⅰ類は以後にもつづく。Ⅱ類は、新代からはじまるⅡ類Bが、105年の湖南・南岳出土鉄器（文献153）や中期頃の湖南・衡陽出土鉄器（文献149）に残る。新器形は、133年の湖南・資興出土銅器（6 - Eb2）、中期の湖南・大庸出土鉄器（6 - Fb4）及び湖南・資興出土陶器（6 - Fa5）、晩期の四川・開県出土銅器（6 - Ma3）、広州漢墓出土銅器（6 - Ka3）、江西・南康出土陶器（6 - Kb2）、广西・浦北出土銅器（6 - La1）などで、口縁の立ち上がりが大きく、しかも口端で再び立ち上がる特徴をもつ（以下、Ⅱ類C）。若干のバラエティがあるが、いずれも中国南半部の地域色を示す。広州漢墓例（6 - Ka3）は中に甑が入っており、釜の機能も果たしていたことが知れる。これは鉄架上に置いていた。Ⅱ類B・Cは以後にもつづく。Ⅲ類では、浅目のⅢ類Dが、早期の湖北・蕪春出土銅器（6 - Ba1・Ba2）、中期の湖南・資興出土陶器（6 - Fa1）に残る。丸底と、高台を伴うものがある。中期の湖南・資興出土陶器（文献227）や湖南・南岳出土陶器（6 - Ec1）は、平底の扁平なもの（以下、Ⅲ類E）。晩期の広州漢墓出土銅器（6 - Ka1）や四川・開県出土銅器（6 - Ma1）は、前漢晩期のⅢ類Bとほぼ同巧である。これ

らのⅢ類は、地域色の強いものと推測する。以後はⅢ類Bのみ残る。

片手鍋Ⅰ類の系統をひくものに、晩期の四川・綿陽出土銅器（文献387）や四川・開県出土銅器（6-Ma4）がある。熨斗の可能性もあるが、把手が口縁でなく胴部につくことや、綿陽例のように環状把手ももつ点で、鍋とした。三国時代には片手鍋はすたれてしまう。

三脚鍋は後漢になると平底から丸底になる。口縁下がややくびれるのも特徴（以下、Ⅱ類）。すべて陶器である。132年頃の河南・襄城例（6-Gb4）が初現。152年の河南・洛陽例（文献265）、晩期の河南・洛陽例（6-Ja4）も同巧。三国時代にも残る。なお、類似した器形で浅目のものは、なかに炭の入っていた例もあり、爐として後に触れる。

釜 前漢からのⅡ・Ⅲ類が残る。いずれも銅器で、Ⅱ・Ⅲ類は前期や中期の湖北・宜昌例（6-Bc3・Fc3）、Ⅲ類は晩期の四川・開県出土例（6-Ma2）などである。Ⅲ類は西晋にも中国南半部では残る。

釜・三脚釜 釜は、球胴釜Ⅱ類B、長胴釜Ⅰ類BとⅡ類B及びⅢ類が残る。球胴釜Ⅱ類Bは、106年頃の山東・章丘出土銅器（6-Ga2）、晩期の河南・洛陽出土銅器（6-Ja2）など。長胴釜Ⅰ類Bは晩期頃の陝西・漢中出土銅器（6-Ib3）や四川・開県出土銅器（6-Ma5）、Ⅱ類Bは早期の湖北・蕪春出土銅器（6-Ba4）、晩期の四川・綿陽出土銅器（6-Ic2）Ⅲ類は早・中期の青海・上孫家寨出土銅器（文献26）、晩期の河南・鞏県出土銅器（6-Mb3）などである。長胴釜Ⅰ類Bを除いて、他は以後も残る。

三脚釜は、67年の江蘇・邗江出土銅器（6-Bb5）や晩期と推定する山東・寿光出土銅器（6-Jc3）がある。新代のものと大差ない。以後は途絶える。

甑 前漢からのⅡ類C・Dが残る。Ⅱ類Cは晩期の河南・洛陽出土銅器（6-Ja2）、Ⅱ類Dは早期の湖北・蕪春出土銅器（6-Ba4）、晩期と推定する河南・鞏県出土銅器（6-Mb2）である。晩期と推定する四川・開県出土銅器（6-Ma5）は丈が高く、底に小円孔を穿つなど、地域色を示す（以下、Ⅲ類）。中期の湖南・大庸出土陶器（文献168）もほぼ同巧。中期の湖南・資興出土陶器（6-Fa5）は円筒形で、底に小円孔を穿つ（以下、Ⅳ類）。後期の広州漢墓出土銅器（6-Ka3）も同巧。これらも中国南半部の地域色といえる。

鼎・鍑 鼎は有蓋鼎Ⅱ類のみが残る。銅器は早期の湖北例（6-Ba6）、後期の広州漢墓例（6-Ka4）、陶器は中期の湖北・宜昌例（6-Fc6）などであるが、例は激減する。以後はすたれるが、東晋代にはミニチュア（水滴か）が、北齊・隋代には鼎形爐として登場する。

鍑は中国北半部で存続。秦～前漢のⅠⅠ類Aの系統をひくのは、後漢晩期の河南・鞏県出土銅器（6-Mb4）、肩が張り、丈も低めとなる（以下、Ⅰ類B）。以後にもつづく。後漢初とみる内蒙古出土鉄器（6-Ac1）は肩が張り、口縁が立ち上がる初出例（以下、Ⅲ類）。北齊に類例がある。Ⅱ類は、後漢代の格好の例をしらないが、北周に類例がある。

鍬尊・温酒樽 鍬尊は、中国南半部では、前漢からのⅡ・Ⅲ類が出土。Ⅱ類はいずれも陶器だが、96年の広東・仏山例（文献520）、晩期の広東・封開例（文献473）などがある。Ⅱ類に棒状把手をつけたⅢ類は、早期の湖北・蕪春出土銅器（6-Ba7）や湖南・資興出土陶器（6-Aa2）、中期頃の広西・合浦出土陶器（6-Db4）、晩期の広東・広州漢墓出土銅器（文献4）などがある。以後は途絶える。中国北半部の出土例は知らないが、2世紀後半頃とみる山東・諸城の画像石（第3図4）には、宴席に、既述した温酒樽と、鍬尊らしき器が1対で描

かれており、存在していた可能性が高い。この資料では、二器とも中に勺をいれ、三脚盤でうけている。温酒樽と対になる鯨尊は羹などを温めたのであろう。

温酒樽（銅製）は前漢代のⅠ・Ⅱ類が存続する。Ⅰ類は48年の河北・邯鄲例（文献521）、中期頃の広西・合浦例（6-Md5）、晩期の広州漢墓例（文献4）など。Ⅱ類は晩期の広州漢墓例（6-Ka5）など。三脚盤を伴うのが基本。以後は途絶える。

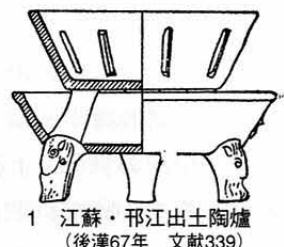
鯨斗 後漢に入って登場する新器種で、浅い三脚鍋に長い把手を1本つけたもの。67年の江蘇・邗江出土鉄器（6-Cc3）が初現例のようである。口縁が斜めに大きく立ち上がるのが特徴（以下、Ⅰ類A）。把手が龍頭形でなく棒状なのも特徴。三国時代初にも残る。鯨斗は三国時代から盛行し、把手も龍頭形が主流となる。

d 雑器（付図6）

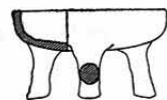
熨斗 いずれも銅器。前漢晩期に登場するⅡ類Aは、67年の江蘇例（6-Bb8）。106年頃の山東・章丘例（6-Ga5）、晩期の河南・偃師例（6-Mc7）や河南・鞏県例（6-Mb6）は柄の基部に補強の突起をつくるもの（以下、Ⅱ類B）。晩期の河南・洛陽例（6-Ja6）は柄が龍頭形になる（以下、Ⅲ類）。106年頃の山東・章丘例（6-Ga6）は、柄が龍頭形で、基部にも補強のための突帯をつけた初出例（以下、Ⅳ類）。同巧品は、晩期と推定する山東・寿光例（6-Jc7）。Ⅱ～Ⅳ類とも以後につづく。

爐 円爐のうち透かしのある内爐は、67年の江蘇・邗江出土陶器（第18図1）が最終例。この下盤は三脚盤。同巧品は中期の湖南・資興出土陶器（第18図2）。晩期の洛陽出土鉄器（第18図3）は環耳をもつ。これらも下盤であろう。後漢晩期の内蒙古出土陶器（第18図4）は、口縁が外反するが、底が脚に沿ってわかれるものである。爐本体であろう（以下、爐Ⅰ類）。晩期と推定する山東・寿光出土銅器（6-Jc5）は、同時代の三脚鍋に似るが浅目であり、三国時代から盛行する初出現になる（以下、爐Ⅱ類A）。

燈 豆燈のⅠ類は、後漢早期の安徽・定遠出土陶器（6-Ad3）のように、脚が太く、皿は小さくなる（以下、Ⅰ類B）。Ⅱ類の系譜をひくものは、晩期の内蒙古出土陶器（6-Ic8）に残る。中期には、Ⅱ類の豆燈と下盤を一体に作ったもの（以下、Ⅲ類）が湖南・大庸出土陶器（6-Fb7）などにある。他方、後漢に入ると、Ⅱ類の脚部が高くなったものが登場する。晩期の内蒙古出土陶器（6-Ka6）など。杯口縁が外反し、脚部が裾で大きく開くのが特徴（以下、Ⅳ類A）。盞燈は、晩期の洛陽出土鉄器（6-Ja9）である。口径約7cmで、外底に柱状突起がある。盞燈台は不明だが、Ⅱ類か次述するⅣ類になろう。Ⅳ類は、晩期の四川・綿陽出土陶器（6-Lc3）。脚は柱状で高くなる。



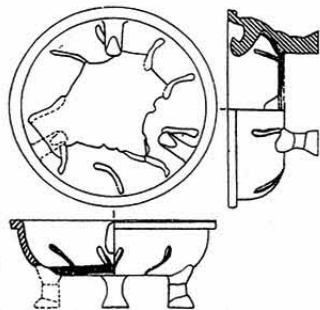
1 江蘇・邗江出土陶爐
（後漢67年 文献339）



2 湖南・資興出土陶爐
（後漢中期 文献227）



3 河南・洛陽出土鉄爐
（後漢晩期 文献267）



4 内蒙古出土陶爐
（後漢晩期 文献30）

第18図 後漢の爐

1・4 1:8

2・3 1:6